

小学校

平成 9 年 度

# 教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

平成9年度

教育研究員名簿

	地区名	小学校名	氏名
学級活動 低学年	墨田	両国小	日向光子
	江東	臨海小	宮内有加
	品川	鮫浜小	三田純子
	大田	大森第二小	韭澤美栄子
	江戸川	平井第二小	吉田裕子
	多摩	連光寺小	<input type="checkbox"/> 川内清文

	地区名	小学校名	氏名
児童会活動	板橋	板橋第三小	松尾淳子
	練馬	大泉第三小	岩崎昇
	荒川	第七峽田小	<input type="checkbox"/> 吉岡淳
	小平	小平第二小	坪池攝子
	八王子	陶鎔小	清水弘美
	立川	立川第六小	綿井登貴子

	地区名	小学校名	氏名
学級活動 中学年	目黒	原町小	高島春枝
	大田	馬込小	○野村隆久
	世田谷	希望丘小	小野寺裕子
	北	柳田小	井田栄一
	武蔵野	桜野小	毛塚洋一
	町田	三輪小	鈴木由美
	福生	福生第一小	齊藤和子
	狛江	狛江第二小	<input type="checkbox"/> 荒木厚子

	地区名	小学校名	氏名
学校行事	世田谷	池之上小	高橋奨
	杉並	高井戸第二小	<input type="checkbox"/> 青木知典
	国分寺	第四小	秋國光宏
	清瀬	清瀬第八小	神永武志
	東久留米	神宝小	松原康之

- ◎ 全体世話人
- 全体副世話人
- 分科会世話人

	地区名	小学校名	氏名
学級活動 高学年	台東	富士小	<input type="checkbox"/> 森田やす子
	練馬	大泉第二小	今田喜紀
	足立	千寿第三小	小山晴美
	葛飾	明石小	佐々木栄子
	江戸川	西小松川小	木崎清子
	八王子	元八王子小	飯田馨
	三鷹	第一小	◎新井正一
	東久留米	第五小	村松久代

担当 教育庁指導部主任指導主事 中田秀昭

平成9年度 教育研究員（特別活動）共通研究主題  
一人一人のよさが生きる集団活動を通して、  
児童の自主的、実践的な態度を育てる指導の工夫

目 次

I 研究の概要 .....	2
II 「みんなでやろうよ！ 楽しい学級活動」 — 次の活動につながる充実感を、一人一人がもてるような支援の工夫— (学級活動低学年分科会) .....	3
III 人とのかかわりを大切にし、自分づくりを目指した学級活動 — 心のふれあい活動を通して— (学級活動中学年分科会) .....	7
IV 自分の持ち味を生かし、みんなで作る学級活動 — 問題解決力が育つ活動の工夫— (学級活動高学年分科会) .....	11
V 全校でつくる創造的な児童会活動 — 代表委員会の活動を通して— (児童会活動分科会) .....	16
VI よりよい自分に出会える学校行事 — 一人一人のよさを伸ばすための工夫— (学校行事分科会) .....	20

＜要 約＞

特別活動は、望ましい集団活動を通して、児童一人一人が自分のよさや可能性を発揮できるようにするとともに、友達のよさを認め合える場を確保し、学級生活や学校生活をさらに向上させようとする自主的、実践的な態度を育成することが必要である。そこで本年度は上記の共通研究主題を設定し、児童の側に立つ指導の工夫を探ることとした。

研究の推進に当たっては、特別活動の活動内容に則して5つの分科会を構成した。各分科会では、特別活動実践上の課題を踏まえ、児童の学ぶ姿をとらえながら指導の工夫について研究した。

# I 研究の大要

## 共通研究主題

一人一人のよさが生きる集団活動を通して、  
児童の自主的、実践的な態度を育てる指導の工夫

科学技術の進歩と経済の発展は、物質的な豊かさと便利な生活をもたらしている。その一方では、核家族化、少子化、地域社会の連帯感の希薄化などの現象が生じ、子どもたちを取り巻く状況は大きく変わってきている。このような変化は、子どもたちが問題解決に向けて共に活動しようとする意欲の低下や子どもたち相互の人間関係の希薄化を招き、集団の中で一人一人のよさが生かされない状況を生み出している。

このような中で、これからの特別活動の指導を充実させていくためには、その特質を踏まえ、子どもたちが自ら問題を発見し、自ら考え、主体的に判断し、解決するために必要な資質や能力を育成することが必要である。さらに、進んで友達と協調し、友達を思いやるような心の教育を重視し、子どもたちが進んで人間関係を広げ、深めていくような集団活動を具体的に展開しなければならない。

以上のことから特別活動部会では、望ましい集団活動を通して、一人一人が自分のよさや可能性を発揮できるようにするとともに、友達のよさを認め合い、自分たちの力で学級生活や学校生活の充実と向上を目指そうとする自主的、実践的な態度を育成することが課題であると考え、本研究主題を設定した。

本研究主題に基づき、本年度は下記のことに重点をおいて研究することとした。

- ・ 子どもたちが問題意識をもって取り組み、一人一人が自分のよさに気づき、創造力を発揮しながら意欲的に活動できるような場の設定や指導・支援、評価の在り方を工夫すること。
- ・ 望ましい集団活動を通して、互いのよさを認め合い、高め合っていくことができる人間関係を育成すること。
- ・ 一人一人が個性を生かしながら、役割を分担して活動できる場を確保し、子どもたちの自己実現への支援の在り方を追求すること。
- ・ 意図的、計画的な指導の下に、活動内容を精選すること。

なお、各分科会では、次のような研究主題を設定し、共通研究主題に迫ることとした。

- ・ 学級活動低学年分科会 「みんなでやろうよ！ 楽しい学級活動」  
— 次の活動につながる充実感を、一人一人がもてるような支援の工夫 —
- ・ 学級活動中学年分科会 人とのかかわりを大切にし、自分づくりを目指した学級活動  
— 心のふれあい活動を通して —
- ・ 学級活動高学年分科会 自分の持ち味を生かし、みんなでつくる学級活動  
— 問題解決力が育つ活動の工夫 —
- ・ 児童会活動分科会 全校でつくる創造的な児童会活動  
— 代表委員会の活動を通して —
- ・ 学校行事分科会 よりよい自分に出会える学校行事  
— 一人一人のよさを伸ばすための工夫 —

## Ⅱ 「みんなでやろうよ！ 楽しい学級活動」

— 次の活動につながる充実感を、一人一人がもてるような支援の工夫 —

(学級活動低学年分科会)

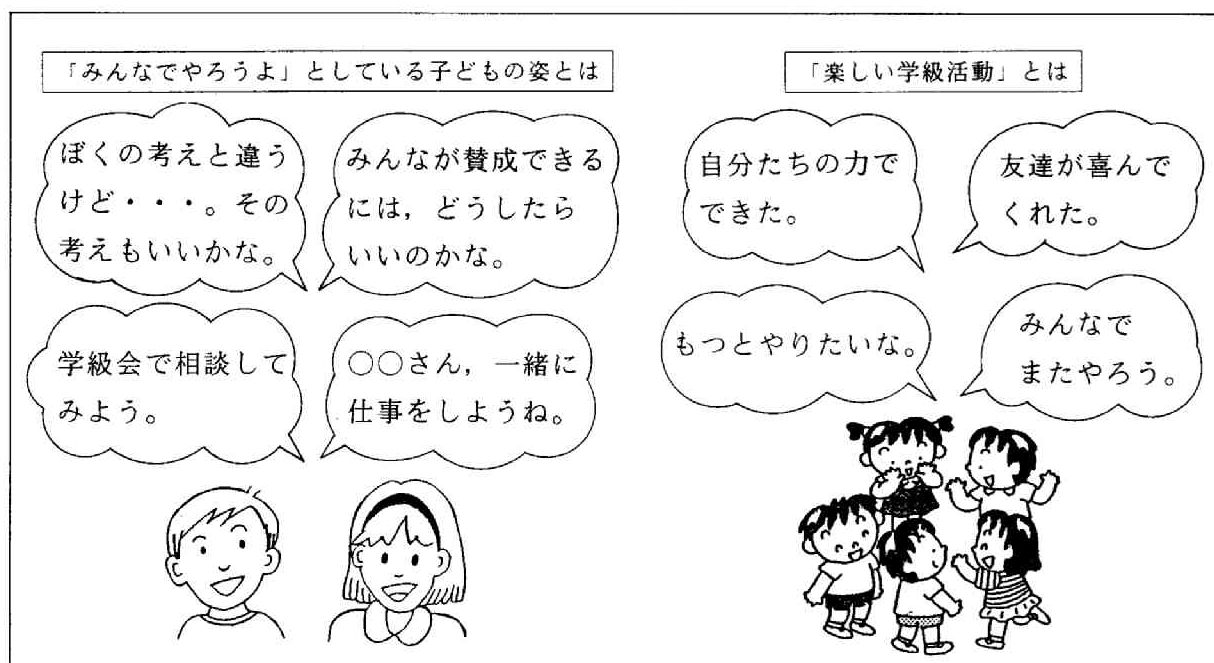
### 1 主題設定の理由

低学年の子どもは、いろいろなことに興味を示し、自分が興味をもったことには、夢中になって取り組む。反面、自分の思い通りに物事が運ばないと、急に意欲が減退してしまうことも多い。入学当初は、一対一のかかわり方をするのがやっとだった子どもたちが、さまざまな体験を通して、集団で活動することの楽しさを知り、集団で行動しようとするのが、次第に増えてくる。そして、その中で、友達と協力すること・譲り合うことの大切さを学ぶ。また、友達の影響を受け、興味の幅を広げていく。

学級活動は、自分たちの学級生活の充実と向上を目指して自主的に行う活動であり、子どもたちの興味や日常生活の小さな気付きをもとに展開していく活動である。子どもたちが、興味をもって取り組んだときに、「やったあ」「やってよかった」という充実感や「楽しかったあ」という実感をもつことができたならば、子どもたちの活動は、より意欲的・主体的になっていくものと思われる。このような楽しい学級活動の体験を繰り返していくことで、「自分たちの問題は自分たちで解決していくのだ」という基本的な姿勢や実践的な態度が、子どもたちに身に付いていくであろう。そして、友達とのかかわり方や互いのよさを知り、徐々に学級集団としての高まりも見られると考える。

そこで、一人一人が充実感を味わえるように支援を工夫し、楽しい学級活動を展開していくことで、子どもの自主的、実践的態様が育成され则认为、本研究主題を設定した。

本研究主題の「みんなでやろうよ」と「楽しい学級活動」を次のようにとらえた。



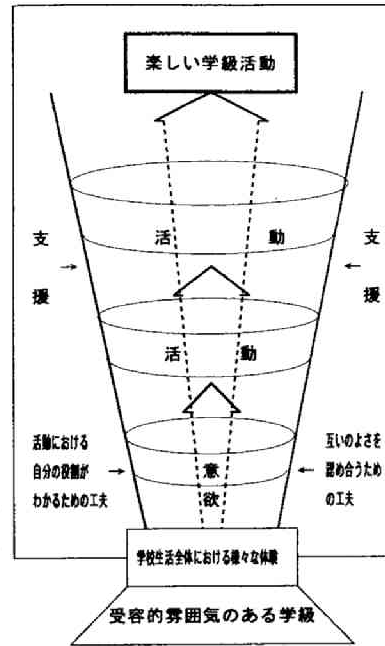
## 2 研究仮説

「やってみたい」という小さな意欲から活動が始まる。その活動を通して、次へつながる充実感が生まれ、それを新しい意欲としてまた活動が始まる。この積み重ねの中で、活動の幅や質が高まっていき、楽しい学級活動になると考えた。

そのためには、次の活動につながる充実感を一人一人がもてるように、支援していくことが重要であると考え、次の二つの視点から研究を進めていくことにした。

- 1 活動における自分の役割がわかるための工夫
- 2 互いのよさを認め合うための工夫

自分の役割がわかり、はっきりしていくことで、この学級に所属しているという気持ちが高まり、心理的安定が生まれる。また、友達とのかかわりを通して、互いのよさを認め合うことができれば、心理的充足が得られ、新しい意欲が生まれると考えた。そこで、研究仮説を次のように設定した。



### 研究仮説

活動における自分の役割がわかり、その活動を通して、互いのよさを認め合う実践を重ねていけば、「みんなでできた」「またやろう」という楽しい学級活動になるだろう。

## 3 研究の視点と手だて

1 活動における自分の役割がわかるための工夫	2 互いのよさを認め合うための工夫
<p>① 一人一人に役割がある場の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●活動内容の工夫</li> <li>●小グループの活用</li> <li>●学級活動コーナーの設置</li> <li>●学級活動スケジュールの作成</li> <li>●司会グループの体験</li> </ul> <p>② 役割を意識するための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●学級活動コーナーへの掲示</li> <li>●役割グッズの活用</li> <li>●役割確認の声かけ</li> </ul> <p>③ なかなか役割を意識できない子どもへの対応</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●グループ内での教え合い</li> <li>●教師の声かけ</li> </ul>	<p>① 友達とかかわり合う場の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●グループ構成の工夫</li> <li>●活動場所・時間の工夫</li> <li>●子ども同士の教え合い</li> </ul> <p>② 互いのよさに気付くための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●活動後の振り返り</li> <li>●学校生活全体を通しての「よかったさがし」</li> <li>●全員へのよかった点の紹介</li> </ul> <p>③ なかなかよさに気付かない子どもへの対応</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●よさに気付かない子どもの把握</li> <li>●教師の声かけ</li> <li>●気付きへの賞賛</li> </ul>

#### 4 研究内容

##### 実践事例1 集会名「2の1クイズ集会をしよう」(2年)

###### <活動の概要>

本時は、事前の話合い活動をもとに集会活動の実践を行った。

以前行った全校集会でのクイズ形式をヒントに話合いをした結果、グループごとに三択問題を出題することにした。例えば、あるグループの野球クイズでは野茂選手や松井選手イチロー選手になって出題した。そのために、名札を作ったり動作を入れて話したりするなど、いろいろなアイデアや工夫が見られた。また、実行委員が推進役となり、集会の準備から進行まで子どもたちの力で進めていくことができた。

互いのよさを認め合う工夫として、集会の終末で「ふりかえりカード」を書き、感想を発表し合った。さらに、教師の終末の助言で子どもたちが気が付かなかったよさを賞賛し「学級活動よかったさがしコーナー」に掲示した。



###### <考 察>

###### 視点1 活動における自分の役割がわかるための工夫

本事例では、集会の成功に向けて十分に話合いを行い、グループごとに準備を進めた。一人一人が出題者になることで全員が役割をもち、協力し合うことができた。「ふりかえりカード」の「今日の集会は楽しかったですか」の項目にクラス全員が「楽しかった」と記入していた。これらのことから、一人一人が役割をもち、協力することにより楽しい集会になったといえる。

###### 視点2 互いのよさを認め合うための工夫

活動後の振り返りの場で、「楽しい集会ができてよかった」「みんなで協力できた」の感想と共に、「○○くんが、がんばっていた」「はじめのことばの○○さんが上手にできた」など、友達のよさを認め合う感想が多く出た。「ふりかえりカード」の記入や感想を発表する場を設けることは、互いのよさを認め合う点で有効であった。

##### 実践事例2 議題「給食の時間が楽しくなる席を決めよう」(2年)

###### <活動の概要>

2学期になり、「給食の時間の席をいつもの生活班によるものではなく、自分たちで相談して決めた席にしてみたい」という案が出された。「普段と違う席に座ることでクラスの友達ともっと仲よくなれると思うから」という理由によるものであった。学級として初めての取り組みであり、子どもたちは大変興味を示した。担任の以前の経験を話してイメージづくりをした後、どんなグループが考えられるかアンケートを行った。そして、アンケートをもとに同じ考えの子ども同士が集まり、グループごとに自分たちの考えを発表す

るための準備を行った。大きな紙にグループの作り方を書いたり自分たちの考えのよい点を紹介したりして、それぞれに工夫して行っていた。

本時は、「どんなグループで食べたいか」を発表した後、「どんなグループがいいか」を話し合った。その結果、好きな人同士が集まって座るという方法に決まった。

早速、翌日にグループ決めをして、終末に実践した。自分たちで決めたグループによる座り方で過ごす給食の時間は、大変楽しかった様子で好評であった。

#### < 考 察 >

##### 視点1 活動における自分の役割がわかるための工夫

今回の活動は、子どもたちにとって初めての取り組みであったので、どんな座り方が考えられるのか担任がいくつかの例をあげながらアンケートを取ることにした。その段階で、担任は自分の考えをもてない子どもを把握することができ、その子どもが話し合いに参加することができるように対応することができた。また、子どもたちは自分と同じ考えの友達がいることを知り、互いの考えを聞いておくことができたので、話し合いに意欲をもって参加することができた。

司会グループとの打ち合わせは、なるべく自分たちの力で最後まで話し合いを行うことができるように、話し合いの進め方のマニュアルをもとにして十分に行った。手作りのバッジをつけたことも手伝い、役割を意識して進行できていた。

##### 視点2 互いのよさを認め合うための工夫

終末に行った「ふりかえりカード」の記入は、子どもたちが自分や友達についての頑張りやよさに気付くよい機会となった。司会グループのよさに触れる子どもが多かったが、司会グループ以外の友達のよさに気付く子どもも少しずつ見られるようになってきている。

## 5 まとめ

### (1) 研究の成果

- ・ 学級活動コーナーの設置や役割グッズの活用など、役割を自覚できるような工夫をしたことにより、活動への参加意欲が高まってきた。
- ・ 活動後に記入した「ふりかえりカード」などをもとにし、教師がよかった点を全体に紹介することで、子どもたちの中に友達のよさを見付けようとする気持ちが少しずつ育ってきている。
- ・ 「ふりかえりカード」の結果をまとめたり、教師が子どもと一緒に活動したりすることを通して、一人一人の実態を把握し、適切な声かけをするよう努めてきた。なかなか役割を意識できなかった子どもやよさに気付かなかった子どもに、少しずつ変容が見られつつある。

### (2) 今後の課題

- ・ 互いのよさに目を向けようという意識は高まってきても、「よかったさがし」の活動は単調なものになりがちである。今後、よさの質的高まりを図るために、教師がいろいろなよさを認め、それを広めるという努力をさらに続けていくとともに、新たな手だても工夫していく必要性を感じている。



### Ⅲ 人とのかかわりを大切に、自分づくりを目指した学級活動

—— 心のふれあい活動を通して ——

(学級活動中学年分科会)

#### 1 主題設定の理由

中学年の子どもたちは、知りたい、やってみたいという好奇心が強く活動的である。交友関係も広がり、仲間と一緒に行動することのおもしろさを求めていく時期でもある。また、自分なりの考えをもち始め、子どもらしい活力のあらわれとして客観的、批判的に物事を見ようとする傾向も出てくる。しかし、気の合った仲間とのかかわりは深まるが、そうでない友達の意見は聞けなかったり、素直に同意できないこともあり、学級全体として人間関係はなかなか深まっていけない状況もある。これは、今の子どもに見られる問題行動としてのいじめや登校拒否にもつながっていくものと考えられる。そして、その要因は、家庭や、地域社会などにおける子どもの人間関係の希薄化に伴って生じる、人とのかかわりの未熟さによるところが大きい。

子どもたちはみんな一人一人違う輝きをもっている。それぞれ違う一人一人が互いに信頼し合い、協力し合う温かい人間関係がなければ、子どもの学級に対する所属感も薄くなり、そこには当然、様々な問題が発生してくる。そこで、一人一人の心の通い合いがみんなの喜びになるような学級の在り方が重要になってくる。一人一人が自分のよさを学級の中で発揮し、学級はそれを受容的な雰囲気を受け止める。つまり、間違っても笑われない、ばかにされない、自分の考えを表現すれば、みんなが受け入れてくれるというような学級集団をつかっていきたい。そのためには、まず、自分自身が自分のよさに気づき、自分のことを好きといえる子どもにしていきたい。同時に、自分とは違う立場や考えをもつ友達がいることに気づき、違いを認め、尊重することができる子どもに育てたい。自分のよさを友達が受け入れ、認め尊重してくれるような「心のふれあい活動」を通して、人とかかわる喜びや楽しさをたくさん体験させることにより、こうありたい自分を見付け、さらによりよい「自分づくり」を目指すことができると考える。一人一人が自分のもっているよさを発揮できれば、係活動にしても、話し合い活動にしても、それぞれの活動はより豊かなものとなり学校生活の充実と向上に結びつくであろう。望ましい人間関係の育成が、子どもたちに安らぎと活動の意欲を引き起こすことは間違いない。

以上のことから本分科会では、人とかかわり、心がふれあう喜びや楽しさを味わえば「自分づくり」を目指した学級活動ができると考え、本研究主題を設定した。

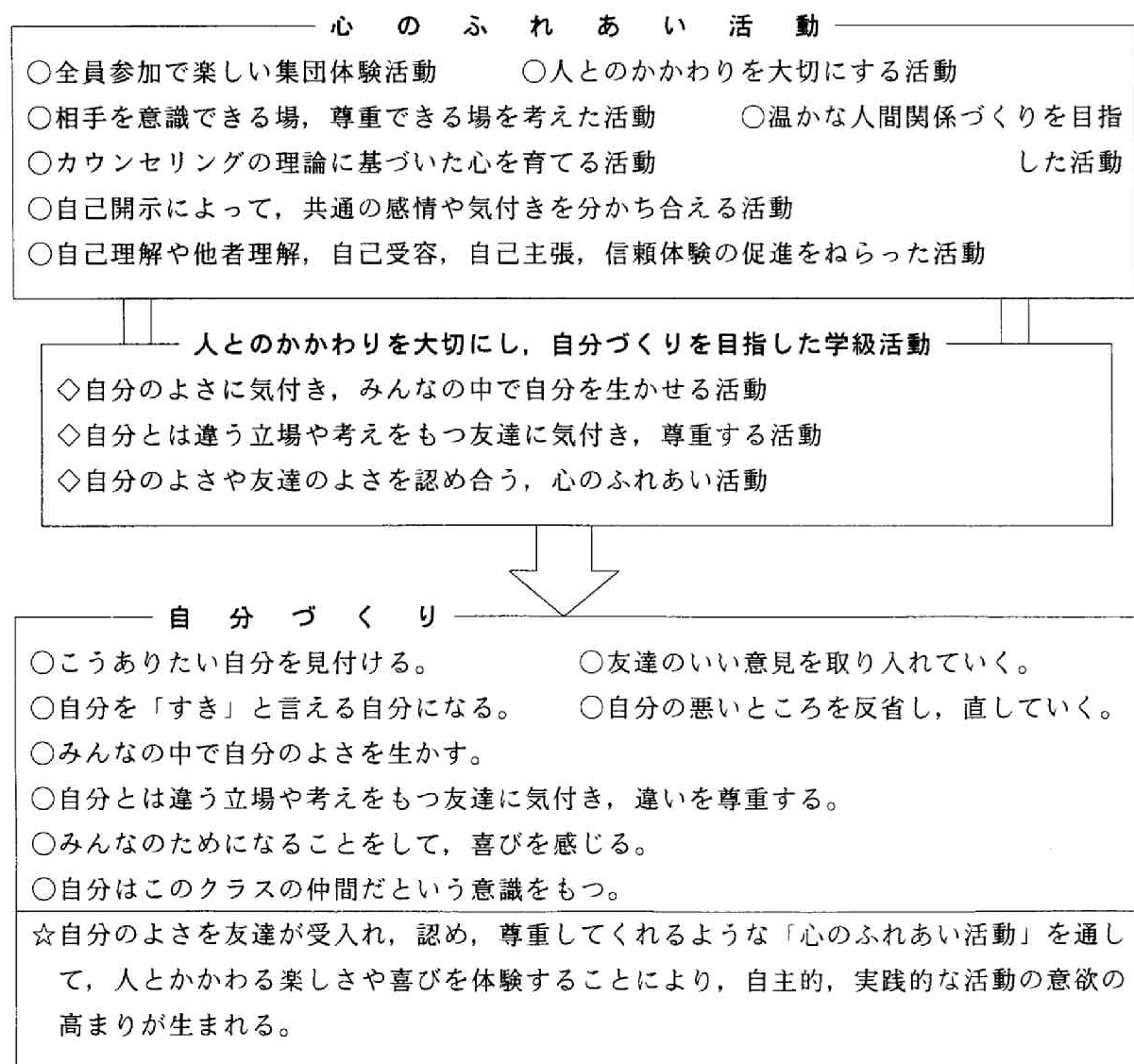
#### 2 研究仮説

「心のふれあい活動」を通して、人とかかわる喜びや楽しさを味わえば「自分づくり」を目指した学級活動になるであろう。

### 3 研究の視点

心のふれあい活動	
<ul style="list-style-type: none"> <li>●グループ体験を生かした人とのかかわりを通して、心理的結合を強める。</li> <li>●学級の一員であるという所属感を深める。</li> <li>●自分はみんなのためになっているという自己有用感をもつ。</li> </ul>	
<p><u>視点1 自分らしさに気付くための工夫</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●自分自身を見つめ、自己理解を深める。</li> <li>●あるがままの自分を認め自己受容する。</li> <li>●自分なりの考えをもち、自己表出意欲を高める。</li> </ul>	<p><u>視点2 友達を受け入れるための工夫</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●互いの違いに気付き、相手意識をもつ。</li> <li>●友達のよさに目を向け認め合い、他者理解を深める。</li> <li>●共感の気持ちを大切にして他者受容できる。</li> </ul>

### 4 研究の構想（主題のとらえ方）



5 研究内容

実践事例 題材「友だちのいいところをさがそう」（3年）

<活動の概要>

子ども同士が友達のよさに気付き、また自分のよさを認めてもらう、という経験を通して、子どもたちの豊かな人間関係を育成していきたいと考え、設定した活動である。構成的グループエンカウンターの手法を取り入れながら、本時での経験を今後の実践活動に結び付けていくという流れで、授業を組み立てた。

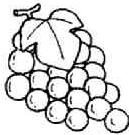

(1) 自分らしさに気付くための工夫

友達のよさをカードに文章化し、交換し合う。その際、「やさしい」「しんせつ」などの抽象的な表現だけではなく、その根拠となる具体的な事実も明記するよう助言を与えた。友達が自分をどう見ていたかということを知ることによって、今まで気付かなかった新たな自分らしさを発見させたいと考えた。

(2) 友達を受け入れるための工夫

互いのよさを認め合うことによって、友達の助言を肯定的に理解しようとする心情や態度を育て、さらに実践に結び付けたいと考えた。本時の活動を実施するに当たっては、前もって1週間程度の期間をとり、全員で多くの友達のよさを見付ける活動を行った。この一連の活動を通して、友達に自分のよさを認めてもらう経験をさせ、自分も友達を肯定的に受け入れようとする受容的な態度を育てていきたいと考えた。

(活動カード)

<div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 20px; margin-bottom: 5px;"></div> <p style="text-align: right; margin: 0;">さん</p> <p style="margin: 5px 0;">あなたのいいところは、こんなところです。</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%; text-align: center; font-size: small;">いいところ1</td> <td style="width: 40%; text-align: center; font-size: x-small;">わたしも、ほくちそう書きます</td> </tr> <tr><td style="height: 30px;"></td><td></td></tr> <tr><td style="height: 30px;"></td><td></td></tr> <tr><td style="height: 30px;"></td><td></td></tr> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%; text-align: center; font-size: small;">いいところ2</td> <td style="width: 40%; text-align: center; font-size: x-small;">わたしも、ほくちそう書きます</td> </tr> <tr><td style="height: 30px;"></td><td></td></tr> <tr><td style="height: 30px;"></td><td></td></tr> <tr><td style="height: 30px;"></td><td></td></tr> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%; text-align: center; font-size: small;">いいところ3</td> <td style="width: 40%; text-align: center; font-size: x-small;">わたしも、ほくちそう書きます</td> </tr> <tr><td style="height: 30px;"></td><td></td></tr> <tr><td style="height: 30px;"></td><td></td></tr> <tr><td style="height: 30px;"></td><td></td></tr> </table>	いいところ1	わたしも、ほくちそう書きます							いいところ2	わたしも、ほくちそう書きます							いいところ3	わたしも、ほくちそう書きます							<p style="text-align: center; font-size: small;">.....学習のふりかえり.....</p> <p style="font-size: x-small;">★きょうの学習をふりかえって、あなたの気持ちを書いてください。</p> <p style="font-size: x-small;">友だちのいいところが見ついたとき.....</p> <p>.....</p> <p>.....</p> <p>.....</p> <p style="text-align: right; margin-right: 50px;"></p> <p style="font-size: x-small;">自分のカードを贈るとき</p> <p>.....</p> <p>.....</p> <p>.....</p> <p style="font-size: x-small;">★きょう学習したこと（友だちのいいところをさがそう）をもとにして、もっとなみよしのクラスにするために、これからどんなことをしたいと書きますか。</p> <p>.....</p> <p>.....</p> <p>.....</p> <p style="text-align: left; margin-left: 50px;"></p>
いいところ1	わたしも、ほくちそう書きます																								
いいところ2	わたしも、ほくちそう書きます																								
いいところ3	わたしも、ほくちそう書きます																								

## <考 察>

カードの中に「きょう学習したことをもとにして、もっとなかよしのクラスにするために、これからどんなことをしたらいいと思いますか」という欄を設けた。本時の活動を今後の実践化に結び付けるための投げかけである。この欄に次のような言葉を書いた児童がいた。

「『友だちのいいところコーナー』つくって、友だちのいいところを見つけたら『友だちのいいところコーナー』に書く。」

この活動をどのように実践活動に結び付けていくかということを考えたとき、運動会、遠足などの学校行事に生かすことばかりに意識が向いていた。しかし、それは大人の思考である。グループの仲間と協力して友達のよさをさがす、というこの活動を通して、子どもたちは「もっとこんな活動をしたい」「もっとなかよしになるためのくふうをしたい」という意識が芽生えてきた。2学期の学級目標である「なかよしのクラス」をつくっていくための活動の一つとして本時を位置付け、子どもの自主的な活動に結び付けていくということが重要な視点である。

また、活動の成果を今後に生かすという意味で、「よささかし」の活動が、友達と協力して行われたということに意義があったと考えている。

## 6 まとめ

### (1) 研究の成果

#### 心のふれあい活動

- ・ 「心のふれあい活動」という集団活動を通して、子どもたちの心が育ち、「自分づくり」を目指すようになるとともに、所属感や心理的結合が強まり、よりよい生活を築こうとする自主的・実践的な態度が育ってきた。

#### 視点1 自分らしさに気付くための工夫

- ・ 自分らしさや自分のよさに気づき、自分を好きになるような「心のふれあい活動」を通して、自分の行動にも自信がつき、自分のよさをいろいろな場面で生かしていこうとする意欲が出てきた。そのため、学級の活動も豊かになり、活動の広がりも見られた。

#### 視点2 友達を受け入れるための工夫

- ・ 友達らしさや友達のよさを認めて受け入れるような「心のふれあい活動」を通して、学級内に受容的な雰囲気生まれ、信頼関係が深まってきた。そのため、みんなのために頑張ろうという意識が育ち、学級の活動に自ら進んで取り組む子どもが増えてきた。

学級活動を展開する上でも基盤となってくるのは、学級内の人間関係であろう。今回の研究を通して、学級内に望ましい人間関係を育てていけば、話し合い活動にしても、学級集会活動にしても、係活動にしても、より活発により豊かに展開するようになり、また、みんなで活動することへの喜びも大きく、意欲も高まるようになることが明らかになった。

### (2) 今後の課題

- ・ 学級の実態や育てたい児童像に合った、さまざまな「心のふれあい活動」の展開の仕方を探っていく必要がある。

## IV 自分の持ち味を生かし、みんなでつくる学級活動

— 問題解決力が育つ活動の工夫 —

(学級活動高学年分科会)

### 1 主題設定の理由

高学年になると、学級活動においてみんなで活動することが楽しいというだけでなく、全校における立場を意識して、みんなの役に立ちたいと感じている児童が増えてくる。また、話し合いを楽しみにし、大切にしていこうとする態度もみられるようになってくる。

しかし、児童を取り巻く今日の社会的背景を見ると、多様な情報が供給されるのに伴い、さまざまな知識を得ることができる反面、疑似体験の増加によって直接体験が不足し、人間関係が希薄になってきているといえる。

本分科会で行った学級活動についての実態調査によると、身近な問題に気が付かなかったり、気付いてもそれを自分のものとしてとらえられなかったりする傾向が児童に見られた。また、自分の思いをうまく表現できない児童も少なくない。学級集団においては、思いがありながら周りを気にして発言できない場面などもみられる。これは自分に自信がなかったり、あるがまますを認め合う集団としての温かさに欠けていたりすることが影響しているのではないかと考えられる。

研究を進めるに当たって、今日の社会的背景と、高学年児童の特性、各学級の実態調査に基づいて、目指す児童像、目指したい学級集団について以下のように考えた。

#### — 目指す児童像 —

- 1 主体的に判断し、活動する子
- 2 自分の持ち味を理解し、発揮する子
- 3 友達の持ち味を理解し、尊重する子

#### — 目指したい学級集団 —

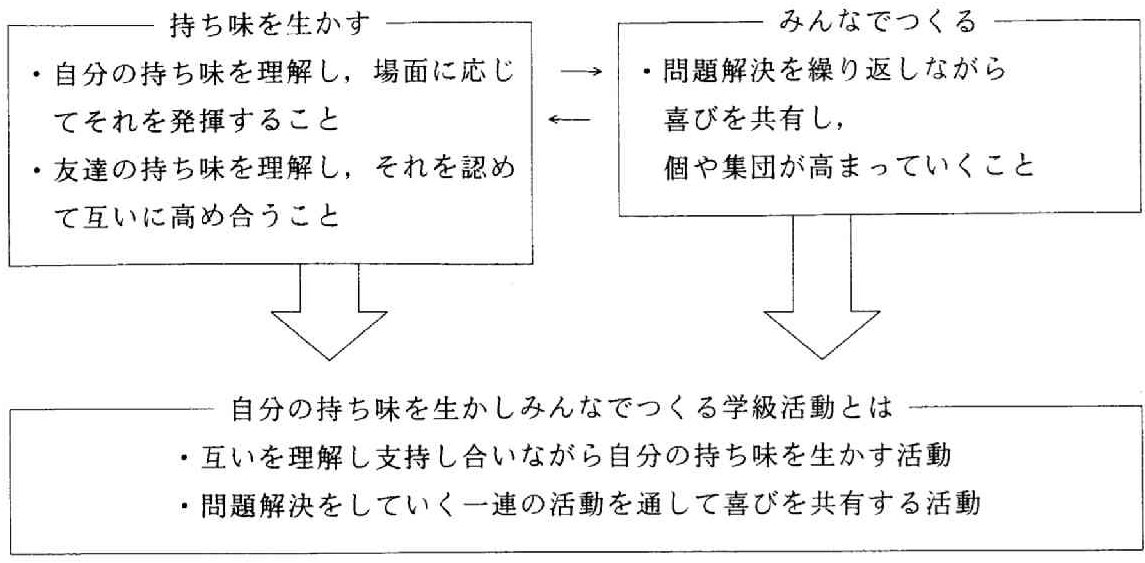
- 1 支持的風土がある学級集団
- 2 生き生きと活動する学級集団
- 3 共に高まろうとする学級集団

これらを実現するためには、児童一人一人が自分のよさや独特の味に目を向けること、またそれを生かすには、学級の成員の間に信頼と支持の気持ちが通い合う雰囲気育てることが必要である。そこで前者を「持ち味」、後者を「支持的風土」とし、研究を進める上でのキーワードとした。

さらに、「問題に気付く・それを共有する・みんなで話し合う・実践する・振り返る」という一連の活動の流れの中で、自己実現していく力を学級活動における「問題解決力」ととらえた。一人一人が自分の持ち味を生かしながら、問題解決を繰り返していく中で、共に活動する喜びを味わえると考え、本研究主題を設定した。

### 2 研究主題について

本分科会では、「持ち味を生かす」「みんなでつくる」を以下のようにとらえ、主題に迫ってきた。



学級活動における問題とは、指導書によれば、

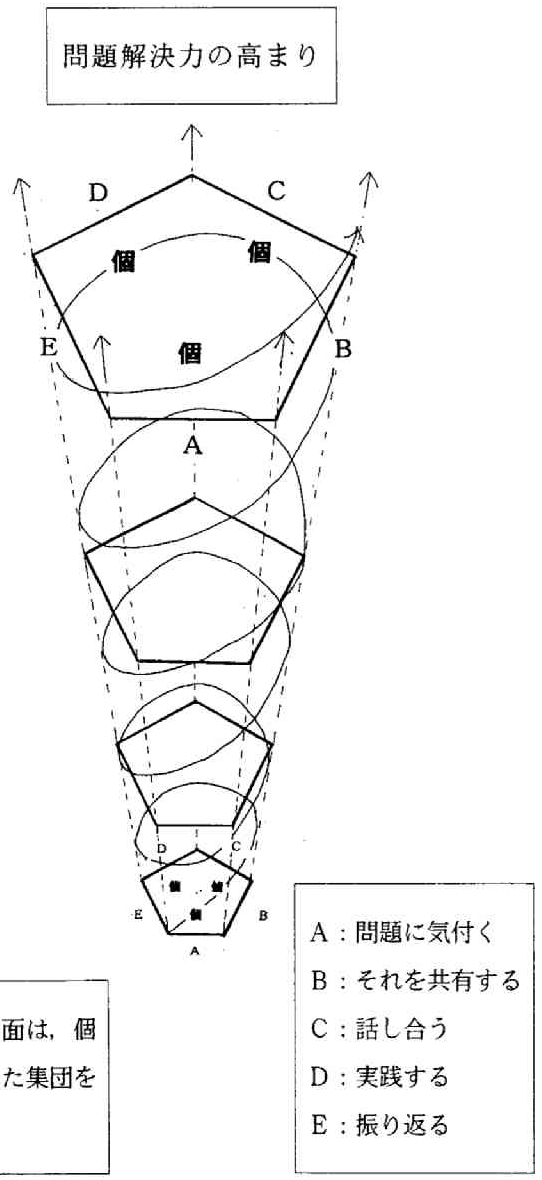
- ◎一人一人が心掛ければ解決することではなく、学級の児童全員が協力して取り組まなければ解決できないこと
- ◎個々に応じて実践されることが多いが、学級の児童に共通している問題で、児童による話し合い活動を取り入れ、解決するのが望ましいと思われることとある。

そこで本分科会では、

- ・学級文化を豊かにするためのこと
- ・人間関係の向上にかかわることを問題ととらえた。

学級活動の一連の活動の流れの中で問題を解決し、自己実現を重ねていく。その積み重ねが一人一人の豊かな人間性を育み、問題解決力はさらに高まっていくと考えた。(図参照)

学級活動がこのようなものとして充実すれば、目指す児童像、目指したい学級集団に近づくであろう。



### 3 研究仮説と研究の視点

研 究 仮 説		
<p>互いを理解し支持し合う指導や、問題解決をしていく一連の活動を通して喜びを共有するための指導を工夫すれば、自分の持ち味を生かし、みんなでつくる学級活動になるであろう。</p>		
研 究 の 視 点		
<p>視点1 互いを理解し支持し合うための工夫</p>	<p>視点2 問題解決をしていく活動を通して喜びを共有するための工夫</p>	
<p>互いの持ち味を理解し、支持し合うためには共通のめあてをもって活動することが大切である。児童はその活動の場で相手の気持ちや立場を察しながら互いに助け合い、認め合い、励まし合う。教師はその活動を見守り、肯定的に評価する。このような活動を積み重ねていくことが必要である。</p>	<p>問題解決をしていく活動を通して喜びを共有するためには、「問題に気付く・それを共有する・みんなで話し合う・実践する・振り返る」という一連の活動を繰り返すことが大切である。その活動の中で、児童一人一人が得た達成感や満足感は集団へと広がり、みんなの喜びとなる。そしてそれは次への意欲となっていく。このような体験を繰り返すことがみんなでつくる学級活動となり、集団としての問題解決力が高まっていくことになる。</p>	
研 究 の 方 法		
<p>共通 どんなクラスにしたいかという思いや願いについて話し合う → 今ある問題に気付く → 議題化</p>		
<p>議題の掘り下げ</p>	<p>○学級活動全体を通して見守る 共通 ・互いを認め合うための自己評価・相互評価 ・個の振り返りを全体に広げるための支援 ・児童の持ち味を見取った肯定的評価 ・集団の質的向上を見取った肯定的評価</p>	<p>問題意識の掘り起こし</p>
<p>司会グループを支える受容的態度</p>		<p>話し合いに向けての情報提供</p>
<p>話し合い活動や実践の活性化</p>		<p>活動の質的向上</p>
		<p>決まったことを実践するための支援</p>

#### 4 研究内容

##### 実践事例1 議題「クラスのマークを決めよう」(5年)

###### 視点1 互いを理解し支持し合うための工夫

(1) 「どんなクラスにしたいかという思いや願いについて話し合う

→今ある問題に気付く→議題化」するための工夫

学年の初めに、「どんなクラスにしたいか」という思いや願いについて話し合い、それをもとにクラスのめあてを決めた。「クラスのマーク」を話し合う中で、クラスのめあては、「クラスの持ち味」としてとらえられ、マークを決めていくための理由となった。

(2) 「議題の掘り下げ」のための工夫

計画委員会の活動の中で、「何のために話し合うのか」を具体的に考えさせるようにした。「話し合った後、クラスはどのようによくなるのか」などの観点を示し、めあてとしてカードに記入するようにした。このことで、議題に深まりが見られ、自分の意見の理由付けがしやすくなった。

(3) 「司会グループを支える受容的態度」を育てるための工夫

司会グループは輪番制とし、誰もが経験できるようにした。進め方に困ったときは、「どう進めたらいいですか」と司会から聞いたり、気が付いた児童が助ける発言をしたりしたときに賞賛するようにし、司会だけに責任を負わせないようにした。この結果、誰もが安心して司会ができるようになった。また、「柱の順番を変える」「違う意見の共通なところを探す」など進行を助ける発言が多く見られた。

スタート	話し合い	話し合った後	話し合った後
この議題にある問題に気が付いていましたか、気が付いていましたか。	前の発言を使って、「おみ」や「柱をかえる」などおみを出して使った。	決まったことをどのようにがんばっていくかを話し合いましたか。	【Tくん】もしやその議題のよかったところは何か、どんな時にそう思いましたか。
この議題が議題になってどう思いましたか。	先生に、言われなくてもやりました。	おみを作るとして、マークを三全部にしようとした。	おみか「うまく言えないとき他人にわかりやすく発言してくれ。」
司会、ター			発言を助けたり励ましたりしましたが、それはどんなことですか。
私も出たと思うけど話し合うことでクラスのどんなところがよくなるか思いましたか。			あまり発言しなよと言った。
みんな、うちのクラスのことを知ってもらえる。			発言を助けられたり励まされたりしましたが、それはどんなことですか。
自分ががんばったことは?	司会を助ける。発言やいろいろな発言をした。	おみを作るとして、マークを三全部にしようとした。	意見が言えなかったあとに、「いい意見だね」と言ってくれた
がんばった友達はそのわけは?	IさんHさん	Fさん	自分が出たことか?
Tくんが「話し合い」を助けた。	前の発言を助けた。	Tくんは、おみを出した。	おみはよってマークを作るとして、おみか「うまく言えないとき他人にわかりやすく発言してくれ。」

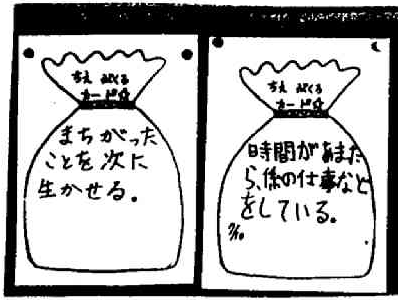
##### 実践事例2 議題「ドッジボール大会の計画を立てよう」(6年)

###### 視点2 問題解決をしていく活動を通して喜びを共有するための工夫

○ 「活動の質的向上」を目指すための工夫

児童は、話し合い活動において生かしていけるような問題解決のための知恵を「ちえぶくろ」





と名付けた紙に書き、学級活動コーナーに掲示している。前回の野球大会の実践では、プログラム係がメダルを渡す項目を入れなかったことで、せっかく作ったメダルと賞状が渡せなかった。また、時間内に終わりの言葉が入れられず、準備した係の児童が生かされなかった。

そこで今回は、「野球大会での失敗を生かして話し合おう」というめあてをたて、話し合いに臨んだ。実際の集会の

場面では、プログラムに「メダル渡し」という項目が入れられていた。また、ルール係が1試合の時間を計算して、時間内にすべてが実施できるように工夫する場面も見られた。

### 実践事例3 集会活動「スポーツレクをしよう」(5年)

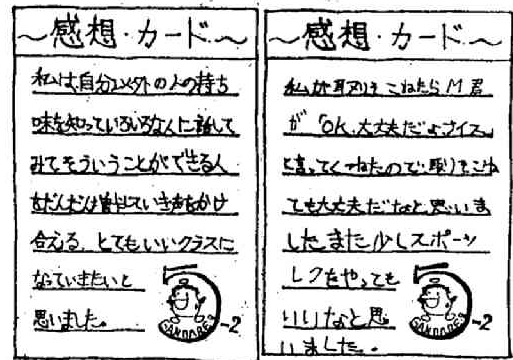
視点1 互いを理解し支持し合うための工夫

視点2 問題解決をしていく活動を通して喜びを共有するための工夫

○ 個の振り返りを全体に広げるための支援

「ふだん遊んでない友達と仲よくなるよう」という話し合いのめあてのもと、種目を決めるのに、3回の話し合いを要した。ゴロベースと野球を「合体」させた「ゴロ球」に決まり、ゆとりの時間を使って実施した。その後、感想カードを書き、「友達の持ち味」についてまとめたものを学級活動だよりに掲載した。全員で読み合うことで、今まで気付かなかった友達の持ち味を知り合った。

学活だより 5-2  
「スポーツレク」 10月27日(6校時)



## 5 まとめ

### (1) 研究の成果

- ① 自分の持ち味が認められることによって集団の中で自信をもって活動しようとする児童が増えてきた。
- ② 一連の活動の流れを意識した学級活動カードができ、それを活用することにより、互いを理解し支持し合う雰囲気が感じられるようになった。
- ③ 活動の様子を肯定的に見ることができる児童が増えてきた。
- ④ 何のために話し合うのかを具体化することによって一連の活動の方向性が明確になり、問題解決力が高まってきた。

### (2) 今後の課題

- ① 適切な振り返りができるように学級活動カードを改善する。
- ② 「問題に気付く」目を育てるための手だてをさらに工夫する。
- ③ 児童の持ち味を意識し、個や集団が質的により高まるための肯定的評価を工夫する。
- ④ 「問題を共有する」「振り返る」時間をできる限り確保する。

## V 全校でつくる創造的な児童会活動

— 代表委員会の活動を通して —

(児童会活動分科会)

### 1 主題設定の理由

子どもたちは、「学校を楽しくしたい」「いろいろな友達と仲よくしたい」という潜在的な願いをもっている。しかし、その願いは、児童会の活動を通して自分たちで実現できるものであるという意識をもつ児童は少ない。また、代表委員や児童会役員を経験したことのあつた児童のほとんどが「やりがいがあった」「みんなの役に立ててよかった」と感じているにもかかわらず、他の児童には代表委員会の活動が十分に見えていないということが、本分科会に所属する研究員の学校での実態調査から明らかになった。

児童会活動のねらいは、「児童会活動という望ましい集団活動を通して、一人一人の児童が学校の一員としての自覚を高め、集団の中で自己をよりよく生かすための能力を培うこと」にある。児童会活動は、学級や学年という身近な集団を超えて全校児童が協力し、自分たちの学校を、より楽しく、豊かな生活を送ることのできる場にしていくためのものなのである。

今日の子どもたちは、大勢で夢中になって遊ぶということがあまりなく、年齢を超えた仲間集団や、いろいろなタイプの友達とかかわるような経験が非常に乏しい。同時に、仲間と協力し合ったり、葛藤を味わったりしながら自分の頭で考え、自分たちの手で物事を解決していくような経験も、普段の生活の中ではしづらくなっている。もとより多くの子どもたちが集まり、日々自分たちの問題の解決に当たっている学校生活こそが、真に豊かな子ども集団をつくることのできる場であり、全校児童という大きな異年齢集団で活動する児童会活動は、最もダイナミックにそれらが実践できる場なのである。

児童会の活動に、自分たちの願いや考えが活かされているという実感をもつことができ、児童会が自らかかわりたくなる魅力あるものになれば、児童会活動を自分たちのものとしてとらえるようになるだろう。そして、児童会活動に自分たちの工夫を生かしていけることを知ったとき、一人一人がそれぞれの持ち場で、さらに新しい工夫を加えていこう。みんなが協力し合いながら、試行錯誤を繰り返す、失敗や苦勞を乗り越えやりきったとき、みんなが作りあげる創造的な児童会活動となるものと考えた。

以上のことから、本研究主題を設定し研究を進めることにした。

### 2 研究仮説と研究の視点

#### (1) 研究仮説について

一人一人のもつ多様な発想や、各学級で話し合われた意見を、そのまま活動に取り入れていくことは難しい。しかし、自分たちの考えがどのように取り上げられ、活かされたかを知ることは、児童会への期待感を高め、自分たちがそこに参加している実感をもつための有効な手だてとなるであろう。

また、児童会活動は構成集団が大きいので、ともすれば既存の活動の枠を超えるのが難しい。しかし、代表委員が全校みんなの発想を生かし、創意工夫を重ねて活動を作りあげる

機会を少しでも多くもつことができたなら、代表委員がもちえる充実感や喜びを全校みんなに広げることができるであろう。

以上のことから、次の研究仮説を設定した。

研究仮説

一人一人の願いや考えを大切にし、互いの創意を生かし合ってつくりあげていけば、みんなが活動の喜びを味わえる児童会活動となるであろう。

ここでは、活動の喜びを、『全校でつくる創造的な児童会活動』を目指した過程の全てから味わえる様々な喜びととらえた。活動の喜びを味わう体験の積み重ねを通して、それぞれの喜びを得る力を育てることができるのではないかと考える。

全校でつくる児童会活動

全校児童の活動の喜び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動に参加して楽しむ喜び</li> <li>・自分の願いや考えが取り入れられる喜び</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の役割をもち、よりよい活動をつくっていく喜び</li> <li>・自分の役割を果たし、役に立てる喜び</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなで協力し合って一人ではできない大きなことをやりとげる喜び</li> </ul>
代表委員の活動の喜び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・与えられた仕事をやりとげる喜び</li> <li>・自分の意見が活かされる喜び</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知恵を重ね合い、よりよい活動をつくっていく喜び</li> <li>・役割を果たし、全校児童に喜んでもらう喜び</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれの役割の大切さを認め合い、創意工夫しながらともに活動をつくっていく喜び</li> </ul>

創造的な児童会活動

(2) 研究の視点について

全校でつくる児童会活動とするためには、全ての学年の児童が、その発達段階に応じて、自分たちが参加している実感のもてる活動にしていくことが必要である。そのためには、一人一人の考えや、学級の話合いから出てきた意見を最大限に活動に反映させ、どの学年の児童も興味をもち、楽しく参加できるものにしていくことが大切である。

創造的な児童会活動にするためには、互いの創意を生かし合うような代表委員会の話合いになることが必要である。代表委員が個人や学級から出された意見を生かし、互いの意見のよさを認め合いながら実践への見通しをもった話合いをする。そして、新しい発想にみんなの工夫を加えて、実現に向けて形づくっていく。その過程で互いの創意を生かし合い、つくりあげていく喜びを味わうことができるであろう。

そこで、次の2つの視点と手だてを設けて、研究を進めることにした。

視点1 一人一人の願いや考えを大切にす活動の工夫

- ・個人の考えを大切にす活動
- ・学級の意見を大切にす活動
- ・異学年の願いや考えを大切にす活動

視点2 互いの創意を生かし合ってつくりあげる活動の工夫

- ・それぞれの意見のよさを認め合える話し合い活動
- ・見通しをもち意見を出しやすい話し合い活動
- ・創造的な活動が実現できるための支援

### 3 研究内容

#### 実践事例1 活動「第2回板リンピックイン代々木を成功させよう」

一人一人の願いや考えを大切にす活動の工夫

- ・個人の考えを大切にす活動
- ・異学年の願いや考えを大切にす活動

互いの創意を生かし合ってつくりあげる活動の工夫

- ・創造的な活動が実現できるための支援

#### <活動の概要>

昨年度、本校70周年を記念して行われた「板リンピック」を、今年も実施することになった。今年度は、ロング集会と全校遠足を一緒に実施することになったため、場所を体育館から代々木公園へと移し行うことになった。全校児童へのアンケートをもとに種目を決め、参加チームの縦割り班ごとに「もりあげるための工夫」を出し合い、代表委員会で話し合った。そして児童一人一人がチームの代表として種目に参加したり、役割をもつことができるよう工夫した。

#### <考察>

6年生が、1年生一人一人に種目の希望の聞き取り調査を行ったり、「もりあげるための工夫」を縦割り班ごとに話し合ったりすることにより、個人の考えの吸い上げや異学年への配慮を行った。また、話し合いの前に、代表委員と共に代々木公園へ集会の場所を下見に行くことで「板リンピック」実現に向けてのイメージがよりはっきりもてるようになった。みんなが楽しみにしていた「板リンピック」であるが、事前の様々な工夫により、全校児童は当日参加して楽しむだけでなく、一人一人が役割をもち集会をつくりあげていく活動の喜びを味わうことができた。また、代表委員は、知恵を重ね合い、創意工夫しながらともに活動をつくっていく喜びを味わうことができた。



## 実践事例2 活動「イラストコンクールをしよう」

一人一人の願いや考えを大切にしている活動の工夫

- ・個人の考えを大切にしている活動

互いの創意を生かし合っている活動の工夫

- ・見通しをもち意見を出しやすい話し合い活動

### <活動の概要>

計画委員会の発案により、代表委員が主体となって計画・実行していくことになった。テーマを決め、全校にイラストの応募を呼びかけた。作品の掲示、感想用紙の作成と配布、賞の設定から授与、そして、全ての広報・宣伝活動まで、自分たちの手による初めてのイベントとなり、はりきって活動する姿が見られた。

### <考察>

個人参加の形をとったイベントであったが、日頃、代表委員会とは密接にかかわることのできない低学年児童からも多くの参加を得ることができ、全校の関心の高さが感じられた。イラストが掲示してある廊下には多くの児童が訪れ、他学年の児童の作品についても感想を言い合ったりする場面が見られた。また、アンケート調査から、来年もやりたいという声が多く聞かれ、個人の考えを大切にすることで児童会活動への参加意欲も高まることが確かめられた。

## 4 まとめ

### (1) 研究の成果

#### 視点1 一人一人の願いや考えを大切にしている活動の工夫

- 全校児童による直接投票を行ったり、出された意見や話し合いの経過がわかるような広報活動を行うことで、参加している実感や作りあげる喜びをもたせることができた。
- 学級の枠にとらわれず、縦割り班などで話し合ったりすることにより、お互いの願いや考えを大切にすることができた。

#### 視点2 互いの創意を生かし合っている活動の工夫

- 集められた意見を事前に掲示する、話し合いに役立つ前年度の資料を準備する、話し合いのめあてを明確にするなどにより、見通しをもって話し合いをすることができた。
- 休み時間の活用や個人参加などを取り入れることにより、児童会活動の間口が広がった。

### (2) 今後の課題

- 事前のアンケートや感想に書かれた児童の様々な活動の喜びを、全校で共有し合ったり確かめ合ったりする場をもてるように工夫していきたい。
- 全校にかかわる児童会の時間の確保が難しくなっているが、休み時間自由参加や自由投稿、個人エントリーや有志参加など、一人一人を対象にした児童会の活動が工夫できることがわかってきた。内容や方法についてさらに工夫を重ね、検討していきたい。
- 活動のねらいや流れについて、教師間で共通理解を図り、その活動が次のどんな活動につながるのか、見通しをもった上での協力を得られるようにしていきたい。

## VI よりよい自分に出会える学校行事

—— 一人一人のよさを伸ばすための工夫 ——

(学校行事分科会)

### 1 主題設定の理由

学校行事では、一人一人の子どもたちが集団活動を通して、多様な場面で自分のよさを発揮する活動ができる。さらに自己を伸ばし、互いの努力を認め合おうという意識が生まれ、豊かな人間性を育てていくことができる。

従来の学校行事では、各行事のねらいを踏まえた上で、子どもたち同士に、より大きな感動体験を味わわせる指導・支援の工夫を行ってきた。それによって、子どもたちは所属感や連帯感、有用感や成就感などを味わってきたといえる。

しかし、本分科会では、一つの行事で子どもたちに有用感や成就感などを味わわせていくだけではなく、一つ一つの学校行事のつながりの中で、自分のよさや友達のよさを感じさせ、学校生活の中でさらにそのよさを伸ばしていく指導・支援が大切であると考えた。

つまり学校行事の中で、児童は「よりよい自分」を自覚し、それを次の行事で生かし、発展させていくと考え、本研究主題を設定した。

### 2 研究仮説と研究の視点

#### (1) 研究仮説

自主的、主体的な集団活動を通して得た自分のよさを、次の行事に生かすための工夫をすれば、一人一人がよりよい自分に出会えるであろう。

#### (2) 研究の視点

##### ① 感動体験を共有するための工夫

##### ② 一人一人のよさを次の行事に生かすための工夫

分科会主題との関連で「自分のよさ」「感動体験の共有」「よりよい自分」を次のようにとらえた。

自分のよさ	感動体験の共有	よりよい自分
他（集団）とのかかわりにおけるよさ	個と集団が相互に働きかけ合いながら、価値ある楽しさを見付け認め合うこと	一歩成長したと感じられる自分
例	例	例
<ul style="list-style-type: none"><li>・責任ある仕事を嫌がらない。</li><li>・精一杯行う。</li><li>・友達を励ます、応援する。</li><li>・自他の意見をまとめ生かそうとする。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・私の頑張りがみんなの役に立った。</li><li>・みんなの応援がうれしかった。</li><li>・みんながまとめられた。</li><li>・予想以上によくできた。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・真剣に考えようとする。</li><li>・活動の先頭に立つ。</li><li>・進んで行おうとする。</li><li>・友達を思いやる言葉がけをする。</li><li>・見通しをもって考えるようになる。</li></ul>

(3) 研究の手だて

視点1 感動体験を共有するための工夫				
			視点2 一人一人のよさを次の行事に生かすための工夫	
事前の活動	当日	事後の活動		事前
<ul style="list-style-type: none"> <li>・イメージをもたせる。</li> <li>・意欲を高めさせる。</li> <li>・子どもの思いを生かす。</li> </ul> 行事に生かせる自分のよさを想起させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・励ます</li> <li>・支える</li> </ul> ⇒	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のよさに気付かせる。 (個人評価)</li> <li>・互いのよさに気付かせる。 (相互評価)</li> </ul> ⇒	より よ い 自 分 に 出 会 う	⇒ 次 の 行 事 へ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人のめあてをたてさせる。</li> <li>・集団の目標をたてさせる。</li> <li>・事前の活動における互いの変容を認め合わせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・賞賛</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・異学年への賞賛</li> <li>・次の行事への意欲を高めさせる。</li> </ul>		

3 研究内容

実践事例1 「運動会」から「移動教室」へ（6年）

(1) 行事間をつなぐ

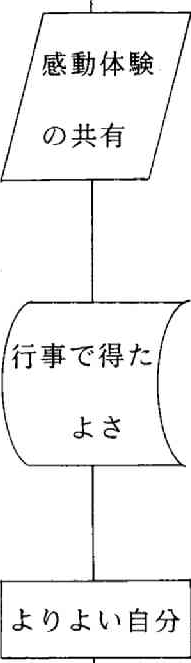

- ・運動会において一人一人にめあてをもたせ、仕事や役割、演技などに進んで取り組ませる。その中でお互いのよさを認め合わせ、努力の過程を大切にさせる。
- ・運動会で得た自分のよさを自覚させ、移動教室の意欲へつなげさせていく。

(2) 行事のねらい

- ・運動会…運動に親しみをもたせ、児童の自主的、創造的活動を育てる。
- ・移動教室…移動教室の集団宿泊の生活を通して、団体生活の楽しさを味わわせる。

(3) 内容

研究の視点	児童のよさ・活動・様子	教師の手だて・支援
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・組体操がとてもよかった。</li> <li>・「練習はつらかったが、本番では100%の力を出せた。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・VTRで演技を振り返らせ、今までの努力などを思い起こさせる。</li> </ul>

運 動 会		<p>・「練習でだんだんうまくなってきたし、本番に見ている人がはく手してくれたのでとてもうれしかった。」</p> <p>◇努力の過程を大切にすよさ ◇互いに励まし、認め合えるよさ ・「カードをつけていると反省や友達のがんばりがわかってよかった。」「みんなとがんばって成功してよかった。」</p> <p>運動会でよりよい自分に出会えたという思い</p>	<p>・行事の始めにたてた個人のめあて、集団の目標を思い返させる。</p> <p>・自分のよかったところ、頑張ったところを評価カードに書かせる。</p> <p>・互いのよかったところを話し合わせる。</p> <p>・一人一人の評価カードに、励ましの言葉を書く。</p>
移 動 教 室		<p>○行事のねらいを知り、自分のめあてをもつ。</p> <p>前○集団のめあてをもつ。</p> <p>○互いに励まし合い、協力して行事に取り組もうとする。</p> <p>○グループ学習をする。</p> <p>○めあてを踏まえ楽しく生活する</p> <p>当○係り活動をする。</p> <p>日○現地・宿舎でのグループ行動</p> <p>・「自分のめあてを忘れず、行事を楽しむことができた。」</p> <p>後・「友達のやさしさを知り、友達との仲がさらに深まった。」</p> <p>・「一人一人が自分の仕事を責任をもって行動していた。」</p> <p>◇よりよいものをつくりだそうとするよさ ◇互いの努力を認め合えるよさ ◇自己をのばそうとするよさ</p> <p>移動教室で、よりよい自分に出会えたという思い</p>	<p>・行事のイメージをもたせる。(活動計画書・資料ビデオ)</p> <p>・自分のよさや友達のよさについて書く評価カードの活用</p> <p>・行事の見通しをもたせる。</p> <p>・学習発表会の実施で子どもたちの活躍の場を用意する。</p> <p>・一人一人の役割を明確にする。</p> <p>・生活の中で、賞賛、励ましを行う。</p> <p>・行事のねらいをしっかりと意識させる。</p> <p>・一人一人のよさや変容を認め励ます。</p> <p>・運動会、移動教室の行事を通して、どんな点で集団の進歩や高まりがあったか考えさせる。</p> <p>・日々の生活の中で、自分のよさを生かせる助言をする。</p>



(4) 考 察

運動会、移動教室それぞれの行事での充実感、達成感を子どもに味わわせることはもとより、それぞれの行事で得た自分のよさを自覚し、新たな意欲へとつなげていく働きかけをしてきた。

まず、互いを認め合える子どもたちにするために、行事当日まで一言感想を一人一人にカードに記録させ、教師も助言や賞賛を記入するようにした。また集団活動においても教師が一人一人のよさを認め励ますことによって、子どもは自分が認められているという意識をもつようになった。そして子どもたちは、友達のよさを認めていくという気持ちや態度に変わってきた。

また、個人、集団の明確なめあてをつくることによって、活動への使命感をもつようになり、子どもたちの意欲も高まった。前の行事で得たよさを次の行事にもつなげていこうとする意識が生まれ、各行事での目標に自分のよさを表すようになった。

実践事例2 「運動会」から「うんどうひろば」へ（1年）

(1) 行事間をつなぐ

- ・運動会で得たよさをさらに伸ばし、次の体育的行事である「マラソン大会」につながるような学年スポーツ大会「うんどうひろば」を計画した。

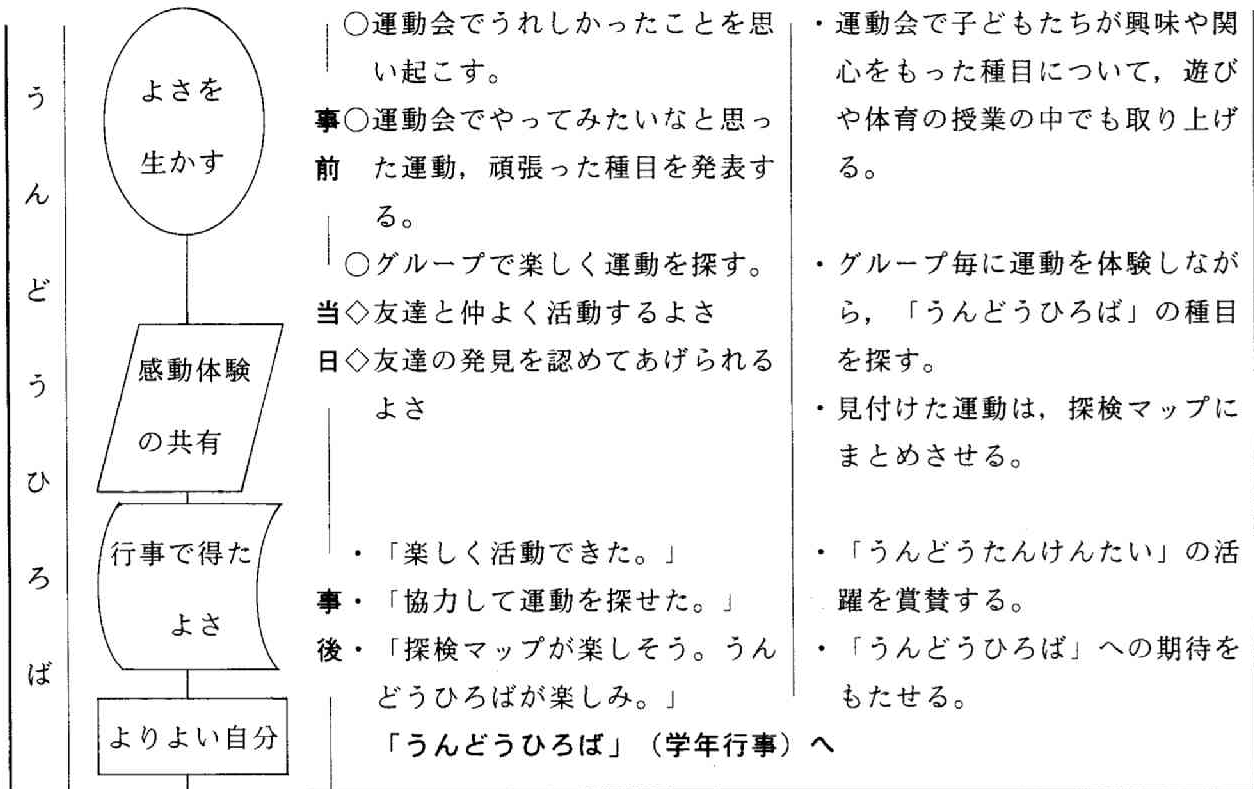
「うんどうひろば」では、運動会で得た一人一人のよさをさらに深め、友達と運動を楽しむながら種目を探すために「うんどうたんけんたい」の活動を取り入れることにした。

(2) 「うんどうひろば」のねらい

- ・運動会で一人一人が味わえたよさを生かして「うんどうひろば」の行事を楽しむ。
- ・学年の友達同士がもっと仲よしになる。
- ・子どもの思いや願いを生かした「うんどうひろば」をつくる。

(3) 内容

	研究の視点	児童のよさ・活動・様子	教師の手だて・支援
運 動 会		<p>・運動会で互いに頑張ったところ、よかったところ、楽しかったところを発表する。</p> <p>事後</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◇仲よくできるよさ</li> <li>◇教え合うよさ</li> <li>◇最後までやり遂げるよさ</li> </ul> <p>運動会で、よりよい分に出会えたという思い</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のよさや友達のよさについて書く評価カードの利用</li> <li>・教師、保護者の励ましの言葉もカードに書き入れ、子どもたちに達成感や所属感を味わわせる。</li> <li>・運動会で得た一人一人のよさを次の行事でも生かすように、励まし、賞賛する。</li> </ul>
		<p>○「うんどうたんけんたい」の活動を通して、「うんどうひろば」で行う運動を探す。</p>	



#### (4) 考 察

運動会での感動体験を共有することからこの「うんどうひろば」を始めることにより、運動会の事後指導と次の行事の事前指導をつないでいった。その中で、運動会で味わえたよさを思い浮かべられるように、「うんどうたんけんたい」の活動を取り入れた。学年で活動し、学級を超えた交流で得られた楽しさやお互いを認め合う大切さは、行事を進める推進力になった。体育的行事にとどまらず、文化的行事である展覧会でも互いの作品のよさを認めていく姿勢が見られた。

#### 4 まとめ

##### (1) 研究の成果

- ① 子ども同士が互いのよさを多面的に見付けるようになった。
- ② 次の行事に対する期待や意欲がより高まるようになった。
- ③ 子どもたちが行事で得た様々なよさや成果を、次の行事で生かし発展させていくために必要な、教師の支援の在り方が明らかになった。

##### (2) 今後の課題

- ① 子どもが自分の変容を自覚できるようにするために、行事の違いや発達段階を踏まえた指導、支援を一層工夫する。
- ② 行事を通して子どもの変容を見取り、一人一人のよさをどのように発揮させるかという点について、教師間の共通理解を図る。
- ③ 各教科の指導内容と関連付けて、学校行事のねらいや時間数をより精選するとともに、教育計画の中での位置付けを行う。